

2017年3月5日(日)

説教:「ゆるし」

聖書:マタイによる福音書18:21~35

弟子のペトロは「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか」と尋ねた。ペトロの「七回までですか」とは、相当頑張ったのことかと思う。しかしイエスは、「七回どころか七の七十倍までも赦しなさい」とお答えになった。「赦し」には、限度を設けてはならないということ。

もし、私たちの罪が七回までだったら赦されるという限定された「赦し」ならどうなるか？ 私たちが人を赦す時の七回というのは、非常に忍耐がいて何とか赦してやろう・・・七回までだぞ！と力がこもるかと思う。しかし、私たち自身が七回までの限定された赦しならすぐにその七回目がおとずれ、罰せられてしまう者ではないか。この七の七十倍の赦しとは、限度を設けない赦し、イエス・キリストの私たちへの“ただただ赦し”であるということ。

私たちには、人を赦すという力もなく、罪を犯さないという強さもない者。そのような私たちを、主なるイエスは、「赦す」とおっしゃる。私たちを赦すとおっしゃったわけである。

以前、教会でランドール先生を中心に非暴力主義についての読書会をしている時、80代のご年配の方も時々参加され沖縄戦の苦しさを語られた。「戦はたいへん、あんな戦はもう二度と起こしてはいけない」、「こんな苦しみは沖縄だけで十分、戦はもう沖縄だけで十分さー」と語った。沖縄だけで十分・・・その言葉を聞いた参加者の一人、「本土」から来ていた方がボロボロ涙を流されて、「本当でしたら、日本本土の犠牲となった沖縄、日本で唯一地上戦を強いられて、民間人を巻き込んで多くの犠牲に遭われた沖縄の方が、ヤマトの人間を憎むのは当たり前なのに・・・」と涙を流されたのである。この方は、今、毎週ゲート前ゴスペルに参加され、辺野古、高江にも毎週出かけて座り込みをされている。ゆるされるという事を感じ取った人は、その人の生き方が変えられるという事なのかもしれない。

23 節以下で一つの譬話がある。まず 1 万タラントンの負債をしている者が赦されるという事が出て来る。この数字は個人が抱える額では有り得ない。日本円に換算すると、3 千億~6 千億円にもなる。これは一県、あるいは国家予算にも相当する金額。当時のイエスの居られたガリラヤ地域は、領主ヘロデの領土でローマ皇帝にこびるように仕え、皇帝の赦しを伺いながら、ガリラヤ住民から税金を巻き上げていた。住民の多くが負債を抱えながら、貧しくされながら、生活をやり繰りして行く。その百デナリオンの負債を抱えた人は、

50 万円から百万円程度。まさに個人レベルの負債ということ。自分は皇帝にこびり、皇帝のゆるしを伺いながらも、民の負債をゆるさない状況が、イエスの時代の背景にあったということ。イエスは、そういう現状に対しては厳しい言葉をもって叱責するわけだ。

今の私たちの社会情勢はどうか？ 沖縄を見る限り、決して住みよいとは言えない。基地負担が「本土」と比べて余りにも重く課せられた状況は、到底平等とは言えない。

イエスは、私たち一人ひとりに赦しが与えられている事を語る。七の七十倍の赦しが、限度の無い赦しが与えられていることを記す。そしてそれは同時に、赦されるという経験をしながらも、その生き方を変えられない状況に対するイエスの叱責もまたある。主の赦しには、人の生き方、この世のあり方への問いがあることを気付かされて行きたい。(神谷)